AOITORI BUNKO

講談社 青い鳥文庫

消える総生島（そうせいじま）

——名探偵夢水清志郎事件ノート——

はやみねかおる／作　村田四郎／絵

講談社 青い鳥文庫　174-3

消(き)える総生島(そうせいじま)
——名探偵夢水清志郎事件ノート——

はやみね かおる

1995年9月15日　第1刷発行
2000年1月11日　第15刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112-8001

電話　出版部（03）5395-3536
販売部（03）5395-3625
製作部（03）5395-3615

N.D.C.913　262p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

© KAORU HAYAMINE　1995

Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上
での例外を除き，禁じられています。

ISBN4-06-148423-0　（児二）

（落丁本・乱丁本は，講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。）

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

消える総生島（そうせいじま）

——名探偵夢水清志郎事件ノート——

はやみね かおる／作　村田四郎／絵

講談社 青い鳥文庫

もくじ

グランドオープニング　探偵映画　5

消える総生島　40

プロローグ　配達された三通の手紙　40

おもな登場人物　42

シーン1　配達されなかった一通の手紙　43

シーン2　総生島へ　54

シーン3　鬼伝説　67

シーン4　霧越館　82

シーン5　鬼ごっこの夜　102

シーン6　クランクイン！　127

シーン7　メリークリスマス！　136

シーン8　人と山が消えた　154
シーン9　館と島が消えた　160
シーン10　鬼のすみか　189
シーン11　爆発　202
読者への挑戦　210
シーン12　今宵、すべてのミステリーファンに　211

スペシャルエンディング　教授のお正月　230

エピローグ　配達された名探偵からの手紙　250

あとがき　260

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ただいまより、はやみねかおる監督、夢水清志郎主演、
『名探偵夢水清志郎事件ノート　消える総生島』
を上映いたします。

グランドオープニング　探偵映画

「映画は浪漫よ！」
真衣が、わたしと美衣の前に四枚の劇場招待券をつきだす。券には大きく『〝映画の日〟かぎりの大サービス！　無料招待券』と、金文字で書いてある。
「……」
あまりの迫力に、かえすことばがない。
「というわけで、いまから映画にいきましょう。」
と、にっこりほほえむ真衣。
どこが〝というわけ〟かよくわからないけど、わたしと美衣は、しぜんにうなずいてしまった。

どうも。わたし、岩崎亜衣です。

これからの長い物語をはじめるにあたって、すこし、わたしたちのことを紹介します。

わたし自身は、どこにでもいる、ふつうの中学一年生。でも、いまから自己紹介をつづけていくうちに、わたしのまわりは、ぜんぜんふつうでないことがわかってもらえると思います。

まず、わたしに劇場招待券をつきだしたのは岩崎真衣。わたしの妹。

そして、わたしとおなじく真衣の迫力に圧倒されてるのは岩崎美衣。やっぱり、わたしの妹。

で、わたしたち三人——亜衣、真衣、美衣は、三つ子の姉妹（ほら、だんだん、ふつうじゃなくなってきた）。わたしが長女で、真衣が二女、美衣が末っ子ってことになる。

三人のなかでだれがいちばんかわいいかって質問は無意味ね。だって、三人とも、おなじ顔をしてるんだもん。しいて答えをいうなら、三人ともかわいいってのが正解。

えっ、ほんとにかわいいのかって？　わたしは、うそはもうしません。現に、

「真衣、その劇場招待券、どうしたの？」

ときくと、

「一枚はクラスの羽根くんからもらったの。もう一枚は陸上部の先輩の水野さん。もう一枚は後

輩の美恵ちゃんから。あと一枚は、古典の矢上先生からもらったの。」
と、天使の笑顔で真衣が答えたもの。
このように、映画のタダ券なんて、ほしくなくてもまわりからプレゼントされるくらい、わたしたちはかわいくて、よくモテる。でも……。
「真衣、後輩の美恵ちゃんって、女の子でしょ。」
「うん。でも、いいじゃん。くれるもんは、もらっとけば。」
あっけらかんという真衣。
この点、わたしたちは、姿形は似ていても、性格はかなりちがうんだなと思う。
「だけど、映画にいくといっても、校則では、子どもどうしが映画にいっちゃダメなんだよ。」
生徒手帳をひっぱりだして、読みあげる美衣。美衣は末っ子だけど、校則とか決まりに関しては、じつにしっかりした面を持っている。
「かまわないわよ、校則なんて！　それより、せっかくの劇場招待券よ。いくっきゃないわ！」
真衣は映画狂だ。ふだんはわりとよく校則を守る真衣も、こと映画に関しては、校則なんて知ったこっちゃないって態度をとる。
美衣が、どうしようという目で、わたしを見た。

やっぱり、こんなときに決断をくだすのは長女の仕事。
わたしは美衣にきいた。
「子どもどうしじゃダメでも、保護者がいっしょならいいんでしょ？」
生徒手帳をペラペラしらべてから、美衣がうなずく。
「じゃあ、問題ないじゃない。だれか大人といっしょにいくことにしようよ。」
大岡越前みたいに、わたしは華麗な裁きをくだした。
「そうはいっても、大人ってだれがいるの？」
と、美衣の不安そうな声。
たしかに……。羽衣母さんは映画がきらいだ。暗くてせまいところにとじこもって、見知らぬ他人が一つのスクリーンを見るってことが、デリケートな（と本人がいってる）羽衣母さんにはたえられないそうだ。
一太郎父さんは論外。超絶にいそがしい一太郎父さんが、わたしたちを映画につれてってくれるとは思えない。（そういえば、小さいときに一太郎父さんにどこかにつれてってもらった記憶が、わたしたちにはないぞ。）
「あと、大人っていえば……。」

わたしたち三人は、しばらく考えて、同時におなじ答えを見つける。
「教授！」

さて、ここで教授の紹介。
わたしたち三人がおなじ顔をしてるってことは、まえに書いたでしょ。だから、わたしたちを正確に見分けることはむずかしい。産みの親の羽衣母さんでも、ときどきまちがえるくらい。
でも、三人を確実に見分けることができるのが、今年の春におとなりに引っ越してきた、〝教授〟こと、名探偵の夢水清志郎。引っ越してくるまでは、M大学で論理学の教授をしていたというので、わたしたちは彼のことを〝教授〟とよんでいる。（本人は〝名探偵さん〟って、よんでほしいみたいだけど。）
「教授か……。だいじょうぶかな。」
わたしたちは考えこんだ。
なんで、映画についてきてもらうくらいで、こんなになやまなくちゃいけないか？　それは、教授っていう人が、知りあってから半年以上たついまでも、よくわからないとこがあるからなの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

教授は背が高い。ファッションはいつも、黒い背広に黒のサングラス。寝るときもパジャマに着かえず、背広にサングラスのままで寝る（だいいち、教授はパジャマを持ってない）。ひょろりとやせたからだを黒の背広でつつんでいるその姿は、夕方にできる細長い影みたいに見える。性格は、なんていうのか……、四字熟語でいえば〝複雑怪奇〟。教授は教授なんだというのが、いちばんぴったりかな？

だけど教授は、たしかに名探偵だ。この春からだけでも、遊園地で五人の人間が消える『伯爵事件』や学園祭での『亡霊事件』の謎を解いたし、ほかにも、神社の木が歩いたり、ミステリーサークルがあらわれたりした事件を、あっさり解決している。

もっとも、教授に常識はない。おまけに、とてもわすれっぽい。（自分の生年月日すらわすれているから、だれも教授の年齢を知らない。）

「教授づて、ふだんは本屋とコンビニしか、いってないでしょ。映画館なんかにつれてって、あばれたりしないかな？」

心配そうに真衣がいう。

まるで、動物園からにげだしたチンパンジーの話をしてるみたい。おまけに、本来ならわたしたちがつれてってもらう立場なのに、いつのまにか、教授を映画につれていく話になってる。

「だいじょうぶだとは思うけどね……。」
そういうわたしも、すこしばかり不安になる。

「あいにく、ぼくはいそがしいんだよ。」
教授はソファーに寝ころんだまま、クロスワードパズルの本から顔をあげもしなかった。
教授の洋館は本にうもれている。台所の食器棚にまで本が進出しているほどだ。
洋館には家具らしい家具がなく、やけに豪華なソファーが二つだけ。あとは、ひたすら大量の本。

「そんなことといわないで、いこうよ。タダ券あるんだよ。」
真衣が教授の顔の前で、招待券をヒラヒラさせる。
「どんな映画、上映ってんの？」
教授が、すこしだけ興味をしめす。
「今日封切りの新作！　謎の殺人事件を名探偵が解決する推理物よ。教授にぴったりじゃない！」
「推理物ねえ……。ぼくには映画の中の名探偵よりさきに謎が解けてしまうから、そんなの見て

も、おもしろくないな。」
教授は自信銀行に自信の定期預金をしてる。だから、教授の底なしの自信は、つきることがない。
「それに、見てのとおり、ぼくはいま、とてもいそがしい。だから、きみたちだけでいってきなさい。」
「いそがしいって、クロスワード解いてるだけじゃない。」
「だから、いそがしいんじゃないか！」
教授は、ふつうの人がひまつぶしにするようなジグソーパズルやクロスワードパズルを、重要な仕事のように熱中してやる、こまった人だ。
「では、気をつけていってくるんだよ。」
そういうと、ふたたびソファーでゴロンとなる教授。まるで、なまけ者の黒ねこみたい。
「いっしょにいってくれたら、バイト代をだすわ。」
わたしのことばに、黒ねこの耳がピクリと動いた。
「映画のあとにラーメンをおごるってのはどう？」
教授のサングラスの目が、わたしを見上げる。

「どこのラーメン？」
「映画館の横の『中華楼』。」
「あそこは値段のわりに量が少ないからな、駅前の『熊公ラーメン』がいい。」
「OK。」
「あと、ギョーザもつけてほしいな。」
「それはダメ！」
このあとしばらく、ギョーザをつけるかどうかで交渉は難航した。でも、ラーメンを大盛りにすることで、なんとか取引は成立した。

わたしたちの住む町を東西に横ぎるメインストリート。このメインストリートから一本南にはいった道ぞいに、映画館はある。名前は『如月館』。
わたしたちが生まれる何十年もまえは、如月館のまわりに、ほかにもいっぱい映画館があったそうなんだけど、いまでは如月館ただ一つだけだ。
売店で、わたしはポップコーン、真衣はスルメ、美衣は柿の種を買う。
教授は、いっぱい買う。（塩せんべいにマシュマロ、ひと口チョコに棒つきキャンディー、ポ

テトチップス、ピーナツ、……ああ、書きならべるのがめんどくさい！）

「教授、そんなに食べてだいじょうぶ？　おなかこわしたりしない？」

美衣が、自分の横の席でガサガサとお菓子を食べはじめた教授にいう。

「だいじょうぶだよ。映画のあとでラーメンを食べなくちゃいけないからね。すこし、ひかえめにしてるんだ。」

「……」

教授は意地きたない。（そのくせ、しょっちゅう、ごはん食べるのをわすれるけどね。）

ピ――――――――――――――ッ。

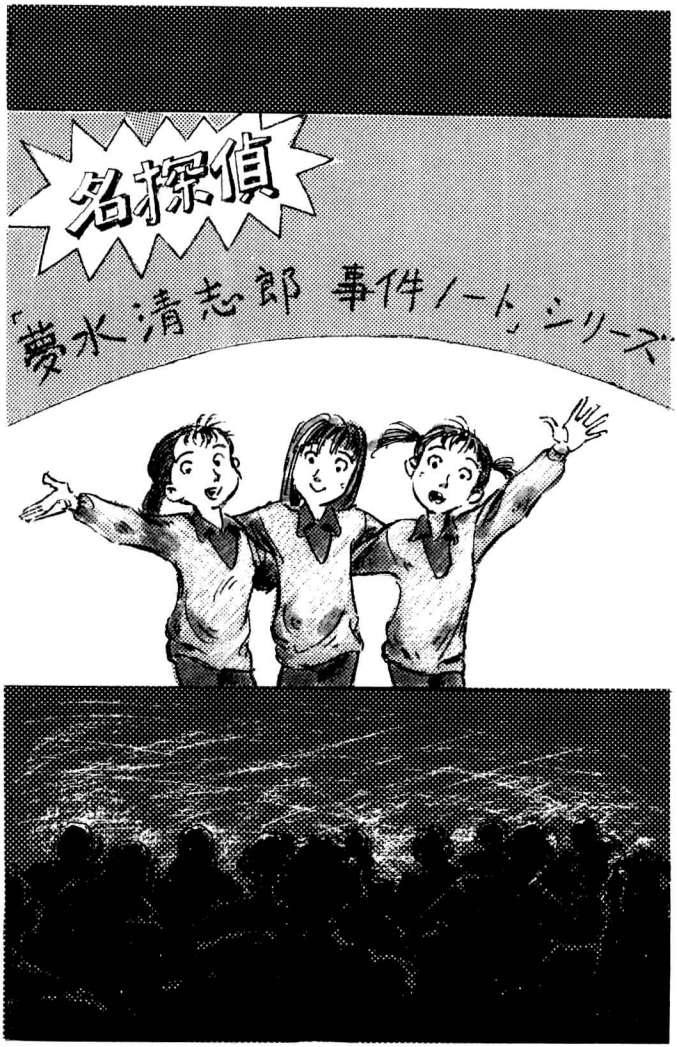
上映合図のブザーが鳴り、天井の照明がスーッと消えていった。

闇の中、銀幕だけがかがやく。

最初はコマーシャルフィルム。

どっかで見たことのあるような女の子が三人でてきて、本の宣伝をする。

「名探偵夢水清志郎が難事件をつぎつぎ解決する『名探偵夢水清志郎事件ノート』シリーズ、講談社より好評発売中！」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb